

「農あるまちづくり講座」で 「生産消費者」を創出



— 農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄 —

先の3月26日に、5カ月にわたる「農あるまちづくり講座 in 所沢市」が修了した。西東京市、世田谷区に続く3カ所目の開催で、6月からは足立区での講座開始を予定している。

この農あるまちづくり講座は「都市農業研究会」の主催で、都市農業研究会は筆者が事務局長をしている川崎平右衛門顕彰会と労働者協同組合連合会が中心になって立ち上げたものである。

川崎平右衛門は江戸時代中期、8代将軍徳川吉宗の命によって、ぼうぼうたる茅野原であった武蔵野台地を新田開発（畑地も新田と呼ばれる）により緑の大地に変えた立て役者。この後、木曾三川の治水工事に当たり、さらには石見の国で銀山の再興にも当たった。

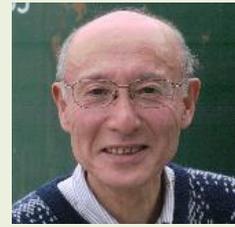
農民たちの協同の力を引き出すことでこれらビッグプロジェクトに取り組んだ川崎平右衛門の顕彰と、現代における協同による地域おこしを狙いに、川崎平右衛門顕彰会を2017年に立ち上げ、毎年、川崎平右衛門ゆかりの地でフェスタを開催。第3回フェスタから労働者協同組合連合会のメンバーが実行委員会に参画するようになり、第5回の小平市大会の懇親会の席での話から都市農業の振興を課題として取り上げることになり、労働者協同組合連合会傘下の日本社会連帯機構を事務局にして22年2月に都市農業研究会を立ち上げた。



ワークショップでのグループ討議の発表風景

研究会のメインの取り組みとして着手したのが、農あるまちづくり講座である。開催場所の地域性も勘案しながら講座のプログラムを作成しており、所沢では全9回、地元で活躍している農業者による講義4回その他、地産地消の取り組み、市の都市計画・農業振興計画、市の農業・農村の歴史、そしてまとめとしてのワークショップで構成した。講座修了後、受講者には何らかの形で農業にも参画する消費者（＝「生産消費者」）となることを期待。そのためのネットワークづくりも兼ねて、講師はすべて所沢で活躍しておられる方とし、講義での話はおおむね半分にとどめ、意見交換を重視した。こうした運営が奏功してか、毎回、熱心なやりとりが行われ、話が深く掘り下げられていくことを実感。主催者側としても毎回の講義が楽しみであった。

話は一転するが、目下、食料・農業・農村基本法改正案が国会で審議中である。改正の目玉は食料安全保障で、平時からの食料自給率の向上がその要件となるが、そのためには担い手の確保が欠かせない。農業経営が成立可能な条件整備が前提であり、合理的価格の形成にとどまらず所得補償が大きな争点となりつつある。いずれにしても、政策支援、税金を充てることなくしては不可能で、国民、特に消費者の理解が不可欠である。消費者の理解を得ていくためには、普段からの消費者に対する働き掛けが重要になる。その第一ステップの一手段として、農あるまちづくり講座を各地で開催していくことを目指すとともに、JAや生協などと連携しての展開をもくろんでいる。時間を要する地道な取り組みであるが、生産消費者を増やしていくことなくして日本農業を守っていくことはできない、と自らに言い聞かせつつ歩みを進めている。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入庫、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「生産消費者が農をひらく」「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上、創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など